

長崎市アイビー薬局での在宅訪問実習(2019年2月6-7日)

千葉大学薬学部薬学科4年 青津 結希

今回、長崎市内にあるアイビー薬局にて2日間にわたり、在宅訪問に同行させていただきました。こちらの薬局では、患者宅へは薬剤師1人で伺い、施設へは事務の方と一緒に2人で訪問しているとのことでした。

(1日目)

2人の患者さんの在宅訪問に同行させていただき、服薬指導の様子を見学しました。1人目の方はお薬カレンダーとお薬ボックスを用いて薬を管理し、薬のセットは全て薬剤師に任せていたのに対し、2人目の方は「e お薬さん」という服薬支援機器とお薬カレンダーを用いて管理をし、お薬カレンダーについては自分でセットしていました。患者の病状や自分で管理したいという希望に合わせて薬の管理方法が変わるという現場を実際に目にすることができ、貴重な機会となりました。また、薬剤師が薬をセットしながら患者に病状や服薬状況などを確認し、患者の疑問にも丁寧に対応している姿が印象的でした。患者が一部薬を飲み忘れてしまった日があったが、それを薬剤師にしっかり申告しており、患者と薬剤師との間に信頼関係がしっかり築けているのだなと感じました。薬の内容に変更があった患者さんでは、担当の医師と連絡をとり、薬の服用方法について確認をとっているところを見学することができました。在宅医療に関わる異なる職種間の連携がしっかり取れていると感じた場面でもありました。

在宅での業務は服薬指導だけではなく、血圧、SPO<sub>2</sub>、体温の測定、さらには聴診器を用いたフィジカルアセスメントも行っていました。フィジカルアセスメントを薬剤師が行うようになるということを受業では学んでいたものの、実際の現場は初めて目にしたので大変勉強になりました。

(2日目)

最初に薬局内の見学をさせていただきました。来局者のほとんどは隣にある眼科の患者で人数は多いが調剤にかかる時間は少ないので、ほとんどの調剤業務は在宅患者用であるとのことでした。トレーに在宅患者ごとに調剤した薬を入れて管理していました。また、患者の症状に合わせたオーダーメイドの薬剤管理が在宅の強みだともおっしゃっており、例えば認知症によって曜日感覚がない患者さんにはお薬カレンダーによる管理は難しいため、日めくりのカレンダーを作成するなどの対応を取っていました。また、在宅患者のほとんどは一包化調剤であるため、全自動分包機が役に立っているとのことでした。分包機に入れる薬の量が多いと薬が傷んでしまう、少ないと何回も補充しなければならないということで、どれくらいの量を入れておくべきか決めるのが今後の課題だとおっしゃっていました。

その後、3件の在宅訪問に同行させていただきました。長崎は坂道や階段が多い土地柄であるため、車を止められる場所から患者さんのお宅まで細い坂道や階段を昇り降りしないといけないことが多く、薬を届ける側も一苦勞の現場が多いことを実感しました。このような土地柄であることも含めて薬局まで薬を取りに行くのが困難な患者が多数おり、在宅での服薬指導は必要不可欠である

とも感じました。

今回の見学を通して、患者さんが「薬剤師が来てくれるようになって薬の飲み忘れが減った」「薬の種類が多くて困っていたが管理が楽になった」というようなお話をされることが多く、在宅医療に薬剤師が関わることの重要性を強く感じることができました。一方で、薬剤師さんによるとまだまだ「なぜ薬剤師が来る必要があるのか」と言われることもあるそうです。在宅医療に薬剤師が関わるのが世間的に認知されていない部分も多いので、その認知度を高めることが、在宅医療をより高度なものにするために必要なことではないかと感じました。在宅では薬局での対面服薬指導では見えてこないような日常生活での問題点や服薬状況を確認することができ、他の医療職種と連携してそれらの問題点を解決しようとする様子の一部を見学することができ、大変貴重な経験となりました。今後の臨床実習に今回の経験を活かしていきたいと思います。

長崎市アイビー薬局での在宅訪問実習(2019年2月6-7日)

千葉大学薬学部薬学科4年 大平 紗里

### ・薬剤師の在宅訪問への同行

実習させていただいた二日間で、薬剤師さんの在宅訪問に5軒同行させていただきました。家に着くとまず、薬剤師さんは持ってきた薬をお薬カレンダーやお薬ケースに整理しながら、患者さんの体調を伺っていました。ある患者さんでは、風邪をひいた際に配合剤を服用していましたが、副作用などを懸念して患者さんの症状に特化した薬に処方変更されていました。この薬が患者さんに合っているかを確認するために、服用している経過について薬剤師さんから一週間後に電話をすと言っていて、服薬指導だけでなく、その後のフォローアップまでなされており、患者さんは安心感があるだろうなと思いました。薬剤師さんの介入による処方変更の提案について、他にも伺いました。例えば、胃の全摘を行った患者さんに対し、酸化マグネシウムが処方されていた事例です。酸化マグネシウムは胃酸に働きかけることで重炭酸イオンを形成し、腸内で便に水分を含ませ、腸管内容を軟化することで排便を促す作用をあらわします。すなわち、胃を摘出した患者さんに対しては不適切な処方だったのです。そこから何度かの薬剤の変更を経て、今ではその患者さんの排便コントロールはよくなったそうです。薬理的なことは教科書などでたくさん勉強しますが、今回、このように薬剤師が薬学的知見から治療に携わる現場を肌で感じ、薬剤師が薬の知識をもつその役割や重要性を体感的に学ぶことができました。薬薬連携が大切であり、これからもっと地域が一つになって医療を包括的に行うことが求められるだろうということがわかりました。

さらに、薬剤師さん自ら血圧の測定や SpO<sub>2</sub> の測定、聴診など、バイタルチェックをスムーズに行っていたことも印象的で、患者さんの異変にすぐ気が付けるよう配慮しているのだと感じました。また、今回訪れた長崎市は坂道が多いことで有名で、実習の前から患者さんの交通アクセスの面などがどうなっているのかと気になっていました。今回訪問させていただいたお宅も山のあたりにある家が多く、車がないと薬局や病院などへ通うのは難しいだろうと思われました。とある患者さんに病院への通い方についてお伺いしたところ、ご高齢ながら自分で車を運転して通っているとのことで、大変驚きました。しかし、土地柄から車がないと移動は難しいとのことで、アクセス面の整備など、地域医療を行う上での問題点があり、だからこそ、この地域では特に薬剤師が訪問することに意義があるのだろうということを感じました。

在宅の現場を見学させていただいて特に驚いたのが、在宅医療を行うのに必要な医療機器の多さです。薬局には、他の医療機関とは違って「販売業」を担う側面があります。器具を洗浄する精製水やアルコール綿などにしても、さらに高度な医療機器にしても、数ある中からその患者さんに適切なものを選ぶのも薬剤師の役割である、と薬剤師さんに教えていただいたことが、とても新鮮で、実務実習に行く前に在宅を見学したことで、そのような観点で捉えられるようになったことは貴重な経験となりました。

## ・薬局の見学

今回お世話になったアイビー薬局では、外来からの処方箋への対応のほかに、在宅用の薬についての整理がなされていました。患者さんごとに専用のトレイを作り、一包化はもちろん、認知機能の低下などで時間感覚が衰えてきてしまい、週ごとのお薬カレンダーでも服用が難しくなってしまう患者さんのために日めくりのカレンダーを作るなどして、ひとりひとりに合わせた調剤を行っていました。このような管理を円滑に進めるために、この薬局では事務員さんも多く勤務していて、トレイの管理や整理といった作業は事務員さんに任せ、薬剤師は頭脳労働に専念し、より薬学的管理に力を入れられるように工夫しているとのことでした。

今までは特に意識していなかったのですが、この二日間で、普段の生活では見ることのできない在宅医療の現場を目の当たりにし、私たちが何気なく生活している地域にも、今回見学させていただいたような患者さんが住んでいて、地域の医療スタッフらが一丸となって支えているのかもしれないという、当たり前のことに気づくことができました。今後さらに高齢化が進み、医療が高度化する中で、患者さんに求められるような薬剤師になれるよう勉強していきたいと強く思えました。このような見学をさせていただき、大変勉強になりました。今後の実習や、薬剤師として働く際に生かしていきたいです。本当にありがとうございました。